

歴史あるカラバフの治療と 医師たち



や果樹園などで有名だ。アゼルバイジャンには、約4000種の価値ある植物（木、低木やハーブなど）があり、その多くは、民間療法で使用されている。12-18世紀に書かれたアゼルバイジャンの古書の中に、中世にカラバフの住民が使用した700以上の薬用植物の種を確認することができた。

ちなみに、園芸や薬用

植物などを含めて豊かな植生を持っていることから、この地域は「カラバフ」すなわち「広い庭」という名前を得た。アゼルバイジャン語で「カラ」は「黒い及び広い」、「バフ」は「庭」を意味する。また、カラバフに生育する多くの植物は薬効成分を持っているだけでなく、固有種であり、カラバフの

8世紀のアルバニア歴史家MoiseiKalankatuiskiは、カラバフを記述する際に「この国は美しい！」と歓喜の言葉を記した。実際にも、カラバフの土地は、その美しさと豊かな天然資源、薬用植物が溢れている林や森、山の牧草地



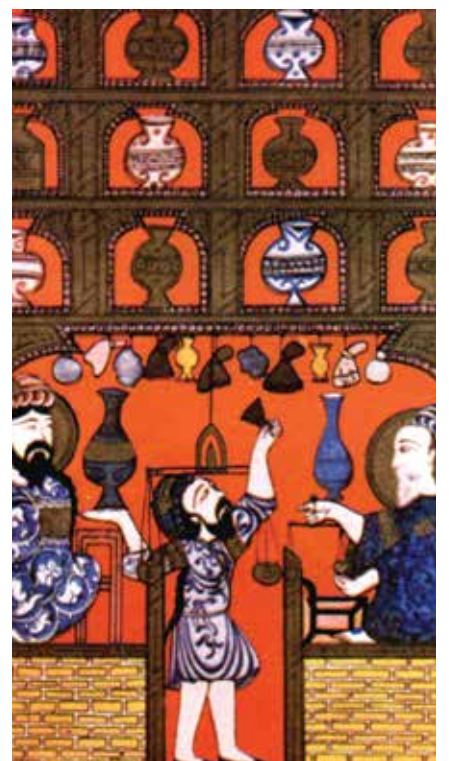


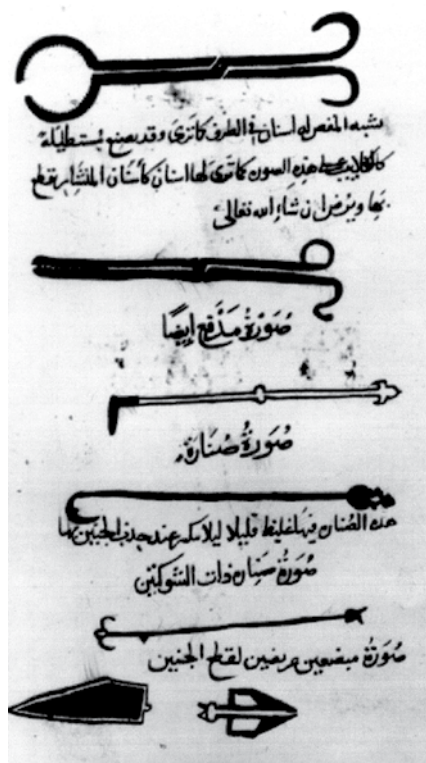
恵まれた土地以外では見ることができないのである。その中の1つが「ハル・ビュルビュル」(HariBulbul)。この花はカラバフの歴史的な中心であるシュシャー市の象徴である伝説的な花だ。また、この市の近くにあるジディル・デュズ山の高原を覆い尽くしているカラバフの有名な緋色のチューリップは、言葉で表せないほど絵のような美しさを見せてくれるだけでなく、自然の媚薬、そして食欲と消化を改善する手段として、民

間療法で使用されてきた。古代ギリシャの著書に、古代から中世初期にかけて、カラバフがアルバニアの一部であったことが書かれている。例えば「紀元1世紀にコーカサスのアルバニアがローマへ特殊な瓶や箱に薬用植物を入れて輸出した」と報告されている。また、コーカサスのアルバニアによく発達した医学が存在していることについては、地元の歴史家 Moisei Kalankatuiski の有名なエッセイ「アルバン

国の歴史」で証明された。彼は「数学、農学、医学などを学ぶ人が、完璧にその目的を達成することができる。」と書いている。

紀元最初の世紀に、コーカサスのアルバニアではキリスト教が普及し始め、この地域にシリアとギリシャの医学が入ってきた。それでその頃、カラバフでは、学生がヒポクラテスやガレノスのような偉大な古代の医師の作品をアルバニアのキリスト教の学校で学ぶことができた。4世紀—5世紀のカラバフでは、ネストリウス派の医師が医学の発展に大きな役割を果たした。ビザン





チン帝国の迫害からコーカサスのアルバニアへ、シリア、ギリシャ、イランから逃亡した医師が、古代ギリシャ医学学校を興した。イランでネストリウスが有名なジュンディシャプール医学学院を興した。そして、その代表者は地元の貴族に医療サービスを提供するために、繰り返し何回もカラバフを訪れていた。

カラバフでは、医療専門家とともにチュルク民俗治療も広く普及していた。中世のチュルク医学は薬草、魔法と手術などを広く使うものだった。

民俗外科は、骨折の専門治療を意味する「シヌグチ」、初期の耳鼻咽喉科医は「チョプチュー」（「チョップ」ースティック、斑点）と呼ばれた。馬のミルクとサワーミルク、ハーブなどでの治療が広がっていた。食欲を改善するためにはヨモギを。内臓の感染症に対してはオトギリソウを。頭痛に対してはスミレとローズを使用していた。

かつて、コーカサスアルバニアの首都ガバラで発掘調査を行ったとき、8-9世紀の医薬品の研究室の遺跡が発見され、そこ

で、科学者たちは、薬や香水の保存のための粘土やガラスの容器を数多く発見した。また、そこでは、治療の油を蒸留するための蒸留装置も発見された。こうした医薬品の保管のための容器は、ベイラガン市での発掘調査中にも発見された。

アゼルバイジャンで薬の最も偉大な繁栄は、イスラム教の普及後に到達した。12世紀にカラバフは、首都がタブリーズであったアタベイレル・エルダギズというアゼルバイジャン国の一部だった。カラバフのバルダとベイラガンという市で、医学部、薬局、病院が存在し



ていて、既知の医療が実践された。カラバフの医師たちはアゼルバイジャンの大都市タブリーズ、ギャンジャー、シャマヒで医学を勉強した。シャマヒでは、有名な作家の叔父さんで「マルハム」と言う医学学校の創設者、Kafiyaddin Omar (12世紀) から授業を受けた。

16世紀のアゼルバイジャンで有名な医師がYusif Garabagiで、その当時は「偉大な教師」と愛称で呼ばれていた。彼は、カ

ラバフに生まれたが、彼の医療や科学の活動のほとんどは、中央アジアのサマルカンドにあるマドラサで教えられていた。どのような運命が、Yusif Garabagiを祖国からこんなにも遠くへ追いやったのか。その理由は、16世紀が、アゼルバイジャン人と、その科学と文化、そしてその国家としての地位確立のための苦難の時だったからである。この期間中、カラバフ含

むアゼルバイジャンの全土が、アゼルバイジャンとオスマン帝国とサファヴィーのスルタンの間の





たと疥癬) を治すために、新鮮なタマネギジュースと硫黄粉末の混合を使用した。

カラバフの首都シュシャーの出身で、アゼルバイジャンの有名な医師であり科学者でもあったMammadgulu Gaibov Garabagi (1818年～1879年) は、アゼルバイジャンの有名な女流詩人XurshudBanuNatavanの個人的な医者だった。

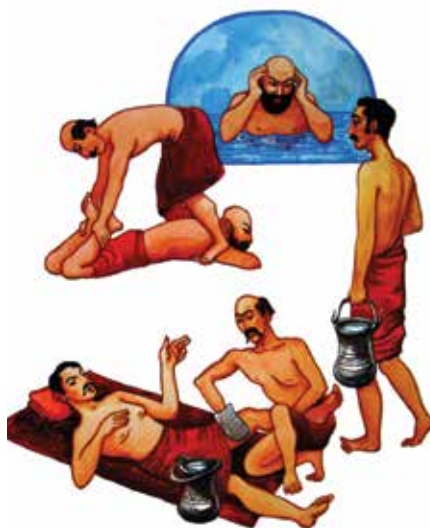
Garabagiは、薬に関する150以上の中世の東洋写本の大規模なコレクションを持っていて、医学や美容に関するアドバイスの多くを彼が所有していた。例えば、日焼けから肌を保護するために、彼は普通の卵白を使うことを勧めたり、消化を改善し胃液や胆汁の分泌を増加させるために、食べる前に酢と蜂蜜混合物である「イスカンジャビナ」を1スプーンを食べることを勧めていた。

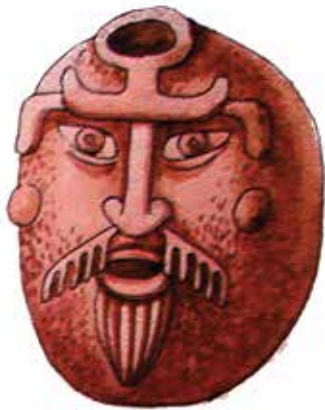
19世紀の初め頃になると、カラバフの首都シュシャーは、アゼルバイジャンの主要な文化の中心地となっていた。この都市は、多くの優れたミュージシャン、詩人、医者

流血戦争の場になった。その結果、この地域の経済と文化が低下し、科学者などは出国しようとしていた。この期間中、多くのアゼルバイジャンの詩人、思想家や医師達も、戦争や政治的混乱から逃れるために、中央アジアとインドに逃れて行った。その人の中にYusif Garabagiもいたのである。

サマルカンドで、Yusif Garabagiは多くの医療論文だけでなく、イブン・シーナの「キャノン医学」への説明および解釈も書いた。また (キャノン医学) を

解消し、記憶の治療および改善するために、Yusif Garabagiは素晴らしいモノとして、消化を改善する蜂蜜と混合生姜を定期的に食べることを推奨した。さらに感染の皮膚疾患 (かさぶ





を育み、国に与えた。シュシャーからの有名な医師 AxundMirza SadigLatifogluLatifov（1901年死亡）は、タブリーズで有名な治療師AbulhasanHekimbashiから医学を学んだ。シュシャーへ帰ったMirzaSadigは、アゼルバイジャンで有名な医師になり、彼の元には、いろいろなところから患者が来ていた。MirzaLatif（ミルザラティフ）は、カラバフの山の牧草地から集めたオトギリソウのブロスを使用してうつ病を治療した。現代の研究でも、オトギリソウは、軽いうつ病に対して本当に効果的であることがわかっている。

古代や中世でも、カラバフには伝統的な

薬局が存在していた。そこのは「アッタル・デウキヤニ」（医薬品店舗）と呼ばれていて、薬だけでなく、パーソナルケア製品のほか、香水や化粧品も販売していた。このような薬局の品揃えは、植物、動物、



鉱物からの何百という薬物だけでなく、その他にも香水としてだけでなく医療目的のためにも使用されていた香があった。そうした中には、カモミール、ミント、チミン、治療の蜂蜜、オトギリソウ、また、アンバーグリズ、サイの角、虎の胆汁、ムスク、胃石の石とかミイラといったエキゾチックなモノも入っていた。このような薬局は1920年代まで、カラバフと全アゼルバイジャンに存在していた。例えば、アグダムでアゼルバイジャンの有名な作家YusifVazirChemenzeminliのお父さん、Mir Babaと言う医師もこのような薬局を持っていたのである。